

アウグスティヌスの創世記解釈における  
天使の認識とその役割について

宮 嶋 南 帆

宮脇 南帆

## 要旨

本稿では、アウグスティヌスの創世記解釈における天使論の意義を、『創世記逐語注解』に見られる天使の認識とその役割を考察する中で明らかにしている。

結論から言えば、アウグスティヌスの天使論は彼の創世記解釈を理解する上で必要不可欠な存在であり、また、人間の道徳的側面からも意義があるといえる。

このことを明らかにするために、まずアウグスティヌスが天使の創造を創世記の中にどのように見出しているかについて扱った。天使の創造は創世記には明示されていない。しかし天使は神の被造物であり、また創造のわざは七日目に神が全てを完成されて休まれている。アウグスティヌスは、これらを根拠に、天使の創造を六日間物語のうちに見出そうとしている。そこで彼は「初めに神は天と地を創造した」という箇所を、靈的物的な無形相的質料の創造とみなした上で、「神は言われた。「光あれ」という箇所を、靈的な無形相的質料に神の御言葉によって形相が与えられ、靈的被造物としての天使が創造されたと解釈する。

また、理性的、靈的被造物が創造されるためには、単に神から形相を与えられるだけでは不十分であって、神の御言葉を認識し、自ら形相を受け取り続けることが求められる。ここから天使にとって御言葉の認識が自身の存在の根底に関わる行為であることが明らかになった。

次に、この天使による御言葉の認識が具体的にどのようになされるのかについて論じた。

この点を明らかにするためにまずアウグスティヌスの理拠 (rationes) という概念を扱った。理拠は事物の根拠・根源としてのアイデアのようなものである。この理拠にアウグスティヌスは三つのあり方を認めている。一つ目に神の御言葉のうちにある不変の理拠、二つ目に創造の六日間で据えられた種子的な理拠、三つ目に統治のわざにおける事物のうちの理拠である。

天使は一つ目の不変の理拠を認識し、その中に天使自身の理拠と神が創造する被造物の総体としての理拠を認識する。それゆえ天使はこの認識において時間を超越しているということがわかる。この超時間的な認識をアウグスティヌスは創世記の一日目、二日目という日という言葉に関係させて日の認識と呼んでいる。また、天使は神が創造した事物を事実に認識する。これをアウグスティヌスは「夕があった、朝があった」という言葉と関係させて、夕の認識と呼んでいる。天使はさらにこれらの被造物に神を賛美するように神へ関わらせるが、これを彼は朝の認識と呼ぶ。これらの日、夕、朝の認識は時間的な秩序に従ってではなく、認識される対象が認識に先行するという論理的な先後関係の下、同時的になされる。

最後に、統治のわざにおける理拠と天使の関係について論じた。

人間は天使と同様に霊的な被造物でありながらも、天使のように超時間的で同時的な認識をなすことはできない。また神の不変の理拠を直接認識することも、種子的理拠を認識することもできない。それゆえ人間は身体的な感覚を通じて、唯一認識することができる事物のうちの理拠を認識することを通じて、段階的に認識を上昇させることで真理へと近づいていくことが求められる。このような認識の在り方は天使と異なるものであるが、一方で、感覚的な事物から真理への上昇という構図自体は、天使の夕から朝の認識と共通の構造を持っているといえる。

天使が、自らが被造物であることを理解し神への賛美へと向かうとき、自己自身の形相性をより完全なものとするように、人間もまた神を賛美することによって自らの形相を受け取り、至福を獲得しようとするのである。またそれは世界の完成へと繋がるものとして、神への協働という形で捉えられる。

アウグスティヌスは人間の認識を天使の認識と並行して捉えることで、このような認識の上昇、すなわち、神への身の向け変え (*conversio*) の重要性を明らかにする。天使は人間にとって道徳的模範であり、彼の創世記解釈は天使を介することで、創造論だけでなく、如何に生きるかという問いに対して、進むべき道筋を示すものであると言える。

## 序論

本稿の目的は、アウグスティヌスの創世記解釈における天使論の意義を明らかにすることである。

アウグスティヌスにとって、創世記解釈は複数の著作にわたって繰り返し扱われる重要な関心事の一つである<sup>1</sup>。この創世記解釈において彼は度々、天使について論じる。それゆえ、彼の天使論は彼の創世記解釈にとって重要な役割を果たしているように思われる。

彼の創世記解釈における天使論の問題を主題的に扱った研究は少ない<sup>2</sup>。しかし、Kleinが「アウグスティヌスの神学と(彼の世界)を、天使なしでは完全に理解することができない点が多々あると言うのは誇張した表現ではない<sup>3</sup>」と論じるように、アウグスティヌスの思想を理解する上で、天使論は不可欠である。

そこで本稿では、まず創世記のテキスト中にアウグスティヌスが如何にして天使の創造を見出していたかを論じる。次に天使の同時的認識とその創造における役割について論じた上で、最後にこの天使の認識という問題が彼の人間観にどのような影響を与えているかを考察する。

### 1. 被造物としての天使

天使は神の被造物であるが、創世記は神による天使の創造を明示してはいない。しかし、アウグスティヌスは天使の創造が創世記の中で省略されているとは考えない(*Civ.Dei*, 11.9, 11.33)。なぜなら、神の他に永遠であるものは何も存在しないのに加えて、創世記には、「第七の日に、神は御自分の仕事を完成され[た]」(創2.2)と記されているため、天使も創造の六日間において創られたはずだからである。

そこで、彼は創世記冒頭の「はじめに神は天と地を創造された」（創 1.1）と「神は言われた。「光あれ」（創 1.3）という記述の中に神による天使の創造を読み取ろうとしている。

アウグスティヌスは、『創世記逐語注解』において「はじめに神は天と地を創造された」（創 1.1）の天と地の創造を、霊的なものと物的なもの無形相的質料（*materia informis*）の創造として解釈している。無形相的質料とは神により無から創造された質料で、形相を受容する基盤として機能し、その後、形相を与えられるような形相可能性（*formabilitas*）として存在する質料である<sup>4</sup>。事物は、無形相的質料に神の御言葉によって形相を与えられることで存在となる（*Gn. Litt.* 5.5.16）。

しかし、無形相的な質料は、未だ形相付けられていない不完全な創造を示している。ではいかにして形相を与えられるのだろうか。

そこで、アウグスティヌスは、創世記 1.1 の天と地の創造と創世記 1.3 における光の創造に、御言葉への言及の有無という差異があることに注目する（*Gn. Litt.* 1.3.8）。「天と地」の創造については、「神は言われた「天地あれ」とは記述されていないが、第一日目においては、「神は言われた「光あれ」と書かれている。この「神は言われた」という聖書の言及によって、創造のわざが神の御言葉によってなされたということが示されているという。天と地という言葉によって示される無形相的な質料に、「と言われた「……あれ」という神の御言葉によって形相を与えられることで、被造物は存在に至るのである。

この御言葉は、未完の被造物を自らのもとへ呼び出すのであり、それによって被造物は無形相でなくなり、個々に形相を与えられるのであ[る]……<sup>5</sup>。（*Gn. Litt.* 1.4.9）

しかし、天使のような霊的・理性的被造物に関しては、完全に形成されるためには、神の御言葉による形相の付与だけでは十分ではない。「神

宮脇 南帆

の御言葉である知恵の不変の光に身を向けるなら、形成される」が「不変の知恵から離反し、愚かに悲惨に生きるとすれば」無形相性におちいるからである（*Gn. Litt.* 1.5.10）。靈的被造物が完全に形成されるためには、その存在を負っている神の御言葉に身を向けかえ（*conversio*）<sup>6</sup>、「御言葉なる神……に倣う」必要があるのであって（*Gn. Litt.* 1.4.9）、六日間の創造のわざへの協働が必要なのである。

さらに天使たちは、常に神の御顔を見て、独り子なる御言葉を享受していると言われる（*Gn. Litt.* 4.24.41）。これは、靈的被造物が生きるためには、創造の瞬間に一度だけ形相を受ければ良いというだけではなく、神の方へ身を向け続けることによって、絶えず形相を受け取り続けることが必要であるということの意味している。

したがって、神の御言葉を認識し、神に身を向けるという天使の行為は、彼ら自身の存在の根底に関わっているのである。では、天使の認識は具体的にどのようなものと考えられているのだろうか。この点について詳しく見る前に、まず理拠の問題について確認していくことにする。

## 2-1. 神の御言葉と理拠

全ての事物は、神の御言葉によって創造されたが、アウグスティヌスは、この神の御言葉のうちに *rationes* すなわち理拠<sup>7</sup> が在ると考えている。彼によれば、理拠はそこから全てのものが創造される全ての事物の根拠、根源である。

*rationes* は *ratio* の複数形であり、これは事物の範型としてのアイデアと同一視することが可能である。アウグスティヌスは『83問題集』第46問「アイデアについて」の中で、理拠（*rationes*）とアイデアの同一視に関して言及している。そこではまず、アイデア（*ideae*）はラテン語で形（*formae*, *species*）とも言うことができるが、それを *rationes* と訳すのは、適切な

解釈から離れてしまうのではないかという疑問が提示される。なぜなら、rationesは、普通ギリシア語ではideaeではなく、λόγοι(原理・根拠)にあたるからである。しかし、イデアは事物の「主要な形 [principales formae]」であり、生成・消滅するものの原理・根拠である。かつて存在したのも、まだ生じていないのも、現在存在するものも、生成・消滅するものは全てイデアに従ってそのようになるのである。この点から、イデアをrationesと同一視することは問題ではないと結論づけられる(Div. Qu. 83, q. 46.2)。

したがって、『創世記逐語注解』においても、rationesはイデアとほぼ同義として扱われていると考えて良いだろう。当然rationesは複数形であるから、神自体を意味してはいない。しかしrationesは全ての事物の原理であり、全ての事物はこれにしたがって創造されたのであるから、rationesは神の精神(mens)のうちにあるとされる(Div. Qu. 83, q. 46)。プラトンはイデア界にイデアを認めたが、アウグスティヌスはイデアを神のうちにも認めていると言えるだろう。

しかし、アウグスティヌスは理拠が神のうちだけでなく被造物のうちにもあるという(Gn. Litt. 9.17.32)。これはどういうことだろうか。

彼によれば、理拠には三つの在り方、すなわち御言葉のうち(in verbo Dei)ある場合、世界の元素のうち(in elementis mundi)ある場合、創造された事物のうち(in rebus)ある場合があり、それぞれ異なる在り方をしているという(Gn. Litt. 6.10.17)。さらに、これら三つの在り方は、それぞれ神の創造のわざに関連付けられて説明される。理拠が御言葉のうちにある場合は、それ自体創造されることなく、全ての創造の原因として永遠的、不変的に存在する。それに対して、元素のうちにある場合と事物そのものうちにある場合は、創造された事物との関係で説明される。元素のうちにある場合は、創造の六日間における被造物のあり方を示している。そして創造された事物そのものうちにある場合は、現在に至るまで時間的に続く神の統治のわざにおける被造物

宮脇 南帆

の在り方を示している (*Gn. Litt.* 5.12.28)。

統治のわざについては後に詳しく論じることにして、まず六日間の創造のわざにおける理拠の在り方について詳述したい。先述のように、アウグスティヌスは、創造の六日間における被造物の在り方を説明する原理として、元素のうちに置かれる理拠を想定している。元素のうちにある理拠は、後に時間のうちで展開されるように、神が同時的な創造の段階で蒔きたいわば未来の種子なるものである (*Gn. Litt.* 6.11.18)。

この未来の種子なる状態にある理拠を彼は、種子的理拠 (*rationes seminales*) と呼んでいる。種子的理拠とは、用語としてはストア派の種子的ロゴス (*logos spermatikos*) に基づくものであるが、彼はこれをキリスト教の創世記解釈に援用したと考えられる<sup>8</sup>。

創造の六日間は、いかなる時間の契機もない無時間的で同時的な創造である (*Gn. Litt.* 4.18.33)。種子的理拠は、その創造の六日間に諸元素と共に、またその中に創造された。この時、この世に存在するものは全て、将来展開する可能性を含んだ種子的な状態で創造された。種子的理拠には、あらゆる状態がいわば折りたたんで置かれているのであり (*Gn. Litt.* 5.20.41)、時間的な事物の運動変化の設計図が、諸元素のうちに編み込まれている。このように折りたたまれた理拠は、統治のわざにおいて、時間的に展開されていく。それぞれの事物は、種子的理拠のうちに隠された数が、おのおのの本性にわりあてられた自らの時間的数を遂行することで明らかな姿へと発展することによって成長、変化していく (*Gn. Litt.* 5.7.20)。

したがって、創造の六日間は、全ての可能性を種子的理拠のうちに含んでいるという意味で完成状態にあるとされる。また、統治のわざにおける時間的な展開の中で、その固有の本性に従って種子の展開がなされることから、はじめの状態にあると言われる (*Gn. Litt.* 6.11.18)。それゆえ、創造の六日間をアウグスティヌスは「時間の根」という言葉で表している (*Gn. Litt.* 6.8.13)。



## 2-2. 創造の六日間における理拠と天使

では、理拠は天使の認識とどのように関係しているのだろうか。ここではまず創造の六日間における天使の認識と理拠の関係について論じることにはしたい。

創世記の六日物語の中では、「夕があり、朝があった。第一の日である [Factumque est vespere et mane, dies unus]」といった記述が六日目まで繰り返されている。しかしながら、創世記において二つの大きな天体と呼ばれる太陽と月が創造されるのは、創造の六日間における第四日目である。また、創造の六日間は同時的な神のわざであるが、六日という時が経過しているように創世記では語られている。そのため、如何にして同時的な創造において日が経過し、しかも四日目の天体の創造に先立って夕から朝に時が移り変わっているのかという問題が生じる (*Gn. Litt.* 4.22.39)。アウグスティヌスは、この問題と関連づけて、創造の六日間における天使の認識と理拠との関係を説明している。

まず創世記で「夕があり、朝があった。……の日である」と言われる際の「日」とは何であるか、アウグスティヌスの解釈を見ていこう。

彼は創世記 1.3 で、第一日目に闇から分けられた光は「日」として呼ばれ、その「日」の繰り返しが創造の六日間であるという (*Gn. Litt.* 4.20.37)。そして、第一日目から第六日目までの「日」は、太陽や月の「物的回転によってではなく霊的な認識によって繰り返される」天使の認識の繰り返しであるという (*Gn. Litt.* 4.26.43)。この天使の認識とは不変の理拠の認識である (*Gn. Litt.* 4.34.53)。

既に論じたように、天使は、御言葉を認識することで形相を受けとる。つまり、天使が神の御言葉のうちに自らの存在原理である理拠を直接認識することが第一日目の「日」である。

では、第二日目以降の日の認識は何を意味するのだろうか。アウグスティヌスは、創世記の第一日目の光の創造についての語りが、他の日と

宮脇 南帆

異なっていることに注目している (*Gn. Litt.* 2.7.15)。第二日目においては、あるものが創造されたという記述の後、「そのようになった [et factum est ita]」と付け加えられている。例えば、第二日目においては「神は言われた。「水の中に大空あれ。水と水を分けよ」と語られた後に、「神は大空を造り、大空の下と大空の上に水を分けさせられた。そのようになった」と続けられている。しかし、第一日目光の創造では、「神は言われた。「光あれ。」こうして光があった」と語られるだけであり、「そのようになった」という言葉は挿入されていない。

この点から、「そのようになった」という言葉によって、神の御言葉のうちにある被造物の理拠についての認識が天使のうちで生じたということが示されているとアウグスティヌスはいう (*Gn. Litt.* 2.8.19)。

つまり創世記における第一の「日」は、天使が神の御言葉のうちに、天使自身の理拠を認識することを意味している。それに対し、第二日目以降の「日」は、それぞれの被造物を神の御言葉のうちに認識することを意味している。つまり、天使がまず神の御言葉における被造物の在り方を認識し、それから事実的に創造されるのである。

したがって、認識する主体である天使が自己自身の理拠を見るのか、他の被造物の理拠を見るのかという点で第一日目と第二日目以降の日の認識は異なっている。一方で、御言葉のうちに被造物の理拠を見るという点では同じであるゆえに、第一日目から第六日目までが同じ「日」と呼ばれる。

また、ここから天使が御言葉のうちに彼ら自身の理拠だけでなく被造物の総体を認識するということが分かる。御言葉のうちには時間的に創られた事物の永遠の理拠 (*aeternae rationes*) があり (*Gn. Litt.* 4.24.41)、天使は日の認識においてこの永遠の理拠を見る。この点で天使の認識は時間を超越したものであり (*Gn. Litt.* 4.24.41)、また天使は「真理の観照によってすべての時間を超越している被造物」 (*Gn. Litt.* 1.9.17) であると言われるのである。

では、「夕があり、朝があった (est vespere et mane)」の「夕」とは何を意味するのか。

天使は、日の認識において、神の御言葉のうちの不変の理拠を認識する。そしてその後に被造物が事実的に創造されたことを認識する。この事実的な創造の認識が夕の認識である (Gn. Litt. 4.24.41)。

次いで天使たちは、被造物自身においてこの全体を見る。この被造物の知り方はいわば下に見下ろすごときのものである [る。] ……かしこにおいては、いわば日のうちに見るごとくであり、こうしてまったく調和した天使たちの統一が同じ真理に参加することによって形成され、日として最初に創られたのである。しかしここ、つまり被造物の本性そのものにおいては、いわば夕のうちに見るごとくである。(Gn. Litt. 4.24.41)

アウグスティヌスによれば、第一日目の夕の認識は、天使自身が「自らが神の本性とは同じでない」(Gn. Litt. 4.22.39) ということを経験することである。つまり、天使は、自らが神の本性と異なることを認識することによって自身が神より劣った存在であり、神により創造された被造物であることを自覚するのである (Gn. Litt. 4.30.47)。

そして第二日目以降の夕において、天使は神により創造された被造物を見るときに、それが神よりも劣ったものであることを知るのである。

したがって夕の認識とは、天使が創造されたものとしての被造物について事実的に認識すること、すなわち第一日目は天使自身について、第二日目以降は他の被造物について認識することである。

では、「朝」とは何か。

[夕ののち] すぐに朝になる……天使的認識は創られたもののうちにとどまらず、むしろこれを直ちに神への賛美と愛へ関わらせる

宮脇 南帆

[*referre*] ののである。そしてこの神のうちで、天使たちは被造物が創られたということではなく、創られるべきであったということを認識するのである。(Gn. Litt. 4.24.41)

第一日目が終わりと、第二日目が始まる「朝」は創られたものを、つまり天使自身を創造者への賛美へ関わらせる認識を示している<sup>9</sup>。さらにこの朝の認識は、創造の各日を次の日へとつなげる役割を有している。天使は、次に創造されるものの神の計画を、第二日目の朝に神の御言葉において知るのである (Gn. Litt. 4.22.39)。

第一の日が終わりと第二の日が始まるこの朝は、創られたものを創造者への賛美に関わらせ、そして自らの後に生ずる被造物の認識を神の御言葉から得るといふ、この光のなす創造者への身の向きかえのことである。(Gn. Litt. 4.22.39)

このような夕の認識から朝の認識にかけて神の方へ再び身を向き変えることは、神のもとへの帰還 (*referre*) を意味するとされる。神によって形相を受けた自らの存在を、神への賛美を通して神に返す (*referre*) のである。それはまた、創造者への身の向けかえを意味する。

また、第二日目以降の朝では、天使はそれぞれの日に創られたものを神への賛美と愛に関わらせるとされる。それは、全ての被造物が賛美に向かうように天使が神に協働することでもある。

以上の議論をまとめると、天使による日の認識とは神の御言葉のうちに理拠を認識すること、夕の認識とは被造物そのものを見ること、朝の認識とは創造された被造物を創造者の賛美に関わらせ、次の日に作られるものの計画を見ることである<sup>10</sup>。

これらの天使の認識は、神による六日間の創造が同時的であるゆえに、時間的ではなく、同時的に行われる (Gn. Litt. 4.29.46)。「日」、「夕」、「朝」

という言葉は、天体の動きに関係する時間的な変遷を意味していないために、天使の認識は同時的になされるのである。ただし、天使の認識の同時性には、認識される対象が認識に先行するという論理的な先後関係が認められている（*Gn. Litt.* 4.32.49）。

### 3-1. 統治のわざ

ここまで創造の六日間における理拠と天使の超時間的で同時的な認識について論じてきた。そこで次に、神の統治のわざと、この統治のわざにおける理拠と天使の関係について考察する。

アウグスティヌスは神の六日間の創造のわざと、統治（*administratio*）のわざを区別して考えている<sup>11</sup>。

創造の六日間において万物は創られ全ては完成されたのであるから、神が七日目に六日間の創造のわざから退かれ安息されたのちに、時間的経過において生じてくる事物を新たに創造することはない（*Gn. Litt.* 4.12.22）。しかし神は安息された後も、あらゆる事物を時間の経過を通して動かし、統治するという（*Gn. Litt.* 5.4.11）。このようなアウグスティヌスの解釈は、創世記2.3の神が七日目に安息されたという記述と、「わたしの父は今もなお働いておられる」（ヨハ5.17）というイエスの言葉を両立させようとするものである（*Gn. Litt.* 4.11.21）。

統治のわざは種子的理拠の展開として理解される。全てが種子的理拠において原因的に創造された六日間の創造のわざに対して、折り畳まれた可能性を孕む種子的理拠が時間的に展開するのが統治のわざである。

元素の中に種子的な状態で存在する理拠は、統治のわざにおける時間的な展開の中でふさわしい時に可能的状態から現実的な状態に現れる。

しかし、奇跡を含むあらゆる時間的な出来事の可能性が同時的な創造で据えられ、統治のわざにおいて神は新たに事物を創造することなく理

宮崎 南帆

拠を管理するのみであるならば、時間的運動には神が全く関与しないようにも考えられるだろう。デカルトの機械論的自然観のように、世界ははじめに創造された時から、まるで機械のように動いているだけなのではないか。アウグスティヌスはこの点について「この力が創られた事物を統治するのをいつか止めるとすれば、同時に事物の形相も止み、すべての自然は崩壊するであろう」(*Gn. Litt.* 4.12.22)と述べている。

神は形相の根源であるが故に、神が統治をやめるならば「世界は一瞬たりとも自存することはできない」(*Gn. Litt.* 4.12.22)。つまり、事物が存在することそれ自体、神が直接、今も世界に働きかけているということの意味している。アウグスティヌスは、創造を一回限り行われた過去の出来事として考えてはいない。六日間の同時的な創造だけでなく、現在に至るまでの時間的な統治のわざも神の創造の在り方の一つと考えているのであり、その意味で神は世界に関与し続けているのである。

### 3-2. 統治のわざにおける理拠と天使

六日間の創造のわざにおいて天使が神に協働することについては既に論じたが、統治のわざにおいても天使は神に協働するとされる。

しかし神の創造への天使の協働を考える際、神の全能性と抵触しないかという疑問が考えられるだろう。アウグスティヌスは、この問いに対して、天使が創造者であるという誤解を招かないように注意して論じている。天使は創造者ではない。なぜなら天使はいかなる本性も創造することは出来ず、神に協働するのみだからである(*Gn. Litt.* 9.15.26)。それゆえ、協働の必要性は神の側ではなく天使の側に求められる。

宇宙全体のより低い部分である地上の事柄を知るために、神は使者を必要とすることはない。……神が使者を持たれるのは我々のため

であり、また使者自身のためである。……神に服従し、仕え、より低い地上の事物に関して神より助言を受け、高次の戒めと命令に服従することは、彼らにとって固有の自然[natura]と実体[substantia]の秩序において良きことだからである。(Gn. Litt. 5.19.37)

神は天使を創造しなかったとしても、世界を創造することができた。協働が必要になるのは、神が天使を必要とするからではなく、天使にとって神のために働くことが善だからである。

では、天使は如何にして神に協働しているのだろうか。残念ながらアウグスティヌスは、この点について具体的には述べていない。彼は、天使が神に協働し時間的な世界に介入して働くことを認めているが、それがいかなることか我々人間には把握することができないという(Gn. Litt. 9.16.29)。しかしながら、時間的な世界で如何にして働いていると言えるか、彼の考えをその言葉から推測することは可能である。

まず、神の奉仕者である天使は、時間的に動くことのない神によって、神の命令が実行されるように時間的に動かされていると彼は言う。

神に従順に服従し、自然的動きによって神の命令を遂行する天神的意志が服従した事物をいわば素材として管理し、神の内なる創られざる彼の原理に従って、あるいは最初の六日の日のわざにおいて原因的に創られた理拠に従って、農夫、あるいは医者がするように、あるものを時間的に創造することは可能である。(Gn. Litt. 9.15.28)

農夫が何かを管理するように、天使はある事物を管理することを任せられているのであり、種子的理拠に従って時間的に、統治という創造のわざに関与することが可能であるという<sup>12</sup>。ただし、この創造のわざへの関与は、比喩的な意味で創造と呼ばれることがあっても、神が六日間の創造のわざの中でおこなったような無からの創造ではない。

宮脇 南帆

さらに、天使は「魂がそれによって動かされる視覚的表象と肉体的欠乏から生ずる欲求 [appetitus] とを効果的に支配し、すべての生ける魂を動かしうる」(Gn. Litt. 9.14.25) とされる。天使は神の意志を表現するために、このように生ける魂に働きかけを行うが、これもまた統治のわざにおける天使の協働であると言える。

### 3-3. 人間と天使

ところで、「神が使者を持たれるのは我々のためであり、また使者自身のためである」(Gn. Litt. 5.19.37) と言われるように、神が使者である天使を持つのは、我々人間のためでもあるとされる。なぜ神が天使をもつことが我々人間のためであると言われているのだろうか。

アウグスティヌスによれば、天使と同様に人間も霊的で理性的な被造物として神によって創造されている。

このように考える根拠として、彼は「そのようになった [et factum est ita]」という創世記の一節が、天使についてだけでなく人間の創造の際にも語られていないことに注目している。人間の創造に関しても「そのようになった」と言う記述がないのは、人間も天使と同様に、自ら御言葉を認識することによって形相を受け取る必要があるからである。一方で、天使や人間以外の他の被造物は、単に神から形相を与えられるのみであり、自らが神の御言葉を認識するような仕方で創造されていない。それゆえ、御言葉の認識によって形成されるという在り方は、霊的で理性的な被造物に特有の在り方である。

最初の光の創造において生じたのと同じことが、人間の創造においても認められる。……というのはその本性そのものは、かの光のごとく知的であり、それゆえ、それによって人間が造られる神の御言



葉を認識することこそ、この本性にとっては成るということなのである (*Gn. Litt.* 3.20.31)。

しかし、天使と人間のあり方には大きな差異がある。それが身体性である。天使は純粹に靈的な存在であるが、人間は物的な身体を持っている。天使は神と等しく永遠性を有する訳ではなく、時間的に存在しているのであるが、神の計画を御言葉のうちに知ることによって時間を超越した認識を持っている。一方、人間は時間的な存在であり、神の御言葉のうちの理拠を直接観照することは不可能であると考えられる。

だが同時に、人間は、神に似せられて創造されている。ただし当然、それは身体に従ってではなく、精神の知解能力に従ってである (*Gn. Litt.* 6.12.22)。

身体性を持ちながらも靈的被造物として精神の知解能力を有するこのような人間の本性を、アウグスティヌスは、『神の国』において、いわば天使と動物の中間的なものとして位置付けている (*Civ. Dei*, 12.22)。そして人間はこの知解能力によって、天使の仲間に加えられるとされる。

神は、人間の本性を、いわば天使と動物との中間のものとして創ったのである。それゆえ、人間がその創造者を真実の主としてこれに仕え、その命令を敬虔かつ従順に守るならばやがて天使の仲間に加えられ、もはや死の入り込まない、終わりなき至福な不死に達するであろう。 (*Civ. Dei*, 12.22)

では、人間は知解能力を如何に用い、つまり何を認識することで創造者に仕え、「天使に等しい者」(ルカ 20.36) として天使の仲間に加えられ、至福な不死に達することができるのだろうか。

### 3-4. 人間の認識と天使の認識

天使は御言葉のうちの永遠なる理拠を見ることによって時間を超越していた。人間に同様の構図を当てはめると、人間も理拠を認識することによって時間性を脱せるのではないか。しかし、人間の場合には、そもそも理拠を認識することができるかが問題となる。

アウグスティヌスは、神の御言葉のうちの理拠も、六日間の創造における種子的な理拠も、人間の感覚と思考からもかけ離れているものであるゆえに、人間は感覚的にそれを認識することはできないという。しかし、統治のわざにおける理拠は、時間的に認識可能である (*Gn. Litt.* 5.12.28)。人間には、身体的感覚を足がかりに、何らかの仕方ですべてを洞察する可能性が与えられているのである。

人間の精神は、創られたものをまず身体的感覚を通じて経験し、その知を弱き人間の能力に許される限りに応じて把握し、ついで何らかの仕方ですべてに到達することが可能であれば、神の御言葉のうちに根源的、不変的にとどまって洞察するのである。 (*Gn. Litt.* 4.32.49)

このように、アウグスティヌスは、人間の「身体的な感覚」に真理の認識へと向かう可能性を見出している。確かにそれは困難ではあるものの、理性的存在である人間は、物的な世界の知覚を通して、統治のわざにおける理拠、すなわち事物のうちの理拠を、弱い知に許される限りにおいて認識する。なぜなら、全ての感覚的な事物は、理拠に従って可能的な状態から現実的な状態となっているからである。そして、神によって創造されたものは、何かしらの形で創造者の面影をとどめている。

この考え方にはパウロ思想からの影響が明確に表れている。パウロはローマの信徒への手紙で「世界がつくられたときから、目に見えない神の性質、つまり、神の永遠の力と神性は被造物に現れており、これを通

して神を知ることができます」(ロマ1.19-20)と述べている。パウロによれば、神はその永遠の力と神性を被造物のうちに示したのであるから、我々はそれらを被造物から理解することができるのである。

我々は感覚的な事物を、身体的な感覚を通して「享受(fruī)」するのではなく、むしろ知解能力を用いて「使用する(uti)」ことによって、より低次のものから、より高次のものへと向かって上昇していくことが可能なのである。また、霊的被造物として、時間的に存在する事物を熟考するによって、御言葉についてのより深い理解へと導かれ、真理に近づいていくことが求められているのである。

この上昇は、低次から高次への認識の上昇という点において、創造の六日間における天使の夕から朝への認識と同様の動きであると言える。

天使は、夕において創られた事物そのものを見るために、下へ視線を向けた。それによって、神が世界を創造したことを知り、自らが神ではなく神の被造物であることを理解する。そして、朝の認識において創造者である神を賛美するために視線を上へとあげる。

人間における外的な事物の認識も、この天使の夕から朝の認識に重ね合わせて考えられるだろう。すなわち、人間も神によって創造された事物を見ることによってそれらの事物が神によって創造されたことを知り、さらに自己自身もまた神の被造物であることを理解する。そうして、創造者の存在を認識することで神の偉大さを知り、被造物へと向けていた視線を賛美のために神へと向けるのである。

アウグスティヌスは、このように天使と人間の認識の間に共通する構造を見出そうとしている。もちろん、人間は、物的な身体を有するゆえに、天使が日を認識するがごとく神の御言葉を直接観照することは不可能である。それゆえ人間の認識は被造物から神へ向かう認識の段階的な上昇が必要とされたのである。

では、天使と人間の認識はそれぞれ神の創造のわざの中でどのような役割を持っているだろうか。

宮脇 南帆

人間は六日間の創造のわざの中で、天使のように賛美を通じて他の被造物を神への賛美に関わらせるという点で協働することはできない。なぜなら人間は時間的な秩序に基づいて行為するのであるから、無時間的な創造では神に協働することはできないからである。

しかし、統治のわざにおいては、人間も神の賛美によって、創造を完成へと向かわせることにおいて神と協働することができる。

天使にとって、創造者である神によりすがり、神を賛美することは、天使自身が幸福となり、至福を獲得することを意味する。それはまた善いものとして神に創造された自分自身をより善いものに、より完全なものにしていくというプロセスであり、神への協働である。人間も神を賛美することで自らの形相を受け取り、至福に至るのであり、この点は天使と同様である。ただし人間の場合には、その身の向け変えは統治のわざにおいてなされなければならない。

霊的被造物が、このように、常に神の方へ身を向け、形相を獲得し続けるのはただ彼ら個人が幸福であるためではなく、神のわざの完成に寄与することでもある。天使も人間も霊的被造物は、より形相を獲得することによって、自己自身のより完全な形成がなされる。神のわざは、人間の助力を必要とはしないが、神によって善く与えられたものを、より善くしていくことが霊的被造物の役割である。そして、そのように協働するとき、神のわざを完成へと導く。それゆえ、人間も、天使と同様に統治のわざにおいて神と協働すると言える。

## 結論

ここまでの議論を踏まえた上で、最後に彼の天使論がその創世記解釈において、また彼自身の思想全体に対して、どのような意味を有しているのかについて考察することにした。

創世記解釈においてアウグスティヌスが天使の問題を扱う理由の一つは、天使論が創造を理解する上で必要であるということである。「光あれ」と語られた創造された第一日目の光と第四日目に創造される天の球体という矛盾、そして第四日目に天体の運動が始まるまでに如何にして日が過ぎ去るのかという問題、そして被造物である天使が創造されたという記述が創世記にはないこと、これらに対して適切に解釈を与えるために、天使の創造の問題を論じることは不可欠であったと言える。

二つ目の理由は、天使が人間にとって道徳的な模範としての役割を持つという点に求められる。人間は物体的な肉体を有しているゆえに天使と異なる。一方で、霊的被造物として神によって創造されたという点では人間と天使は等しい。神へ身を向き変え、賛美に向かうという霊的被造物としての認識の在り方について、アウグスティヌスは両者を並行して捉えている。人間も天使のようになりうるという点で、天使は人間と隔絶した存在ではなく、人間の生の延長にある姿として描かれる。

天使と人間の認識に共通する認識、つまり被造物から神へと視線を上昇することは身の向き変え (*conversio*)、すなわち回心を示す。この視線の転回は、『告白』『神の国』など主要著作を貫いている考えである。

『告白』では、彼の回心に至る経緯が記されているが、彼自身の人生は、まさにこのような身の向き変えを体現している。被造物へと心を奪われる生活をしていた青年アウグスティヌスは、マニ教徒であった時に物質的な存在のみを信じていた。その後、新プラトン主義、キケロの著作に出会い、哲学的探究へと目が開かれて、真理である神を知る。11巻からは時間論が展開されるが、そこでも分散から集中、そして超越という外的な認識から内的な心象、そして神への認識という人間の認識の上昇の構図が表れている。

また、『神の国』では、神から被造物への転回による天使の分裂について語られている。天使が創造された際に、神へと視線をあげず、自己自身にとどまるとき天使は転落する。神への固着から離れ、自己自身にと

宮脇 南帆

どまることを、彼は高慢（*superbia*）と表現している（*Civ.Dei*, 12.6）。

このように、アウグスティヌスにとって視線をどちらに向けるかが、如何に生きるべきかという問いであり、道徳的課題であった。天使と人間が共通して語られていることは、両者が理性的被造物として同様の課題に直面していることを示している。とはいえ、天使はその課題に対して正しく応えたということができよう。一方で個々の人間は、今まさに、絶えずこの課題に直面している。その点で、天使は人間の模範として機能するのであり、如何にして生きるかという問いに対して進むべき道筋を示していると言えるのである。

## 注

- <sup>1</sup> アウグスティヌスの著作のうち創世記解釈を扱うものとして『創世記に関するマニ教への反論』（388/390年）、『未完の創世記逐語注解』（394/427年）、『告白』（397/401年）11-13巻、『創世記逐語注解』（401/415年）、『神の国』（413/427年）11巻がある。執筆年については、Fitzgerald, Allan, ed., *Augustine through the Ages*, Grand Rapids: Eerdmans, 2009を参照。
- <sup>2</sup> アウグスティヌスの天使論に関する近年の研究として Klein, Elizabeth, *Augustine's Theology of Angels*, Cambridge University Press, 2018 と Wiebe, Gregory, *Fallen Angels in the Theology of Augustine*, Oxford University Press, 2021がある。日本の研究では、片柳栄一「創造における *conversio*」（『中世思想研究』25, 59-79, 1983年）、河野一典「アウグスティヌスにおける霊的質料の問題」（『中世思想研究』33, 98-109, 1991年）、同じく河野一典「アウグスティヌスにおける霊的被造物の創造の問題」（『中世思想研究』43, 69-86, 2001年）がある。Daniélou, Jean, *The Angels and Their Mission According to the Fathers of the Church*, New York: Newman Press, 1957 と Muehlberger, Ellen, *Angels in Late Ancient Christianity*, Oxford: Oxford University Press, 2013 もアウグスティヌスの天使論に言及しているが、ごく簡単に触れるだけである。その他、辞典の項目として Fleteren, “Angels”, *Augustine through the Ages*, Grand Rapids: Eerdmans, 2009 と、Madec, Goulven, “Angelus” *Augustinus Lexicon*, vol.I. Basel: Shwabe & Co., 1986がある。研究が少ない理由として、Kleinは、天使への関心は無意

味な空想に耽溺することとして考えられ、知的なメリットが無いように思われているからではないかと指摘している (Klein. op. cit., 3)。

- <sup>3</sup> Klein, Elizabeth, op.cit., 3.
- <sup>4</sup> 無形相的質料は、無形相的な質料は完全に無として形相を欠いているのではなく、ほとんど無に近い状態で存在しているとされる (Conf. 12.8.8)。
- <sup>5</sup> 『創世記逐語注解』、『神の国』の日本語訳は、アウグスティヌス著作集(教文館)に拠った。ただし、訳語の統一のために一部用語を修正した。
- <sup>6</sup> 霊的被造物の身の向き変えの問題については、片柳「創造における *conversio*」『初期アウグスティヌス哲学の形成』(創文社, 1995年)を参照。
- <sup>7</sup> *rationes* について『創世記逐語注解』の邦訳者である片柳は、「理性では創造の永遠的理性的根拠という意味が希薄にしか表現されないため、造語した」として、「理拠」と翻訳している(『創世記注解』アウグスティヌス著作集16, 片柳栄一訳, 教文館, 1994年, 321, 1巻注(10))。これに基づき、本稿も被造物の根拠としての *rationes* の訳語を「理拠」とする。
- <sup>8</sup> 片柳栄一「アウグスティヌスの時間論の形而上学的背景」『中世思想研究』45, 23-40, 2003年, 30, Knuuttila, Simo, “time and creation in Augustine” *The Cambridge Companion to Augustine 2nd.ed.*, Cambridge University Press, 2014, 82 参照。
- <sup>9</sup> 悪魔の離反はこの夕から朝にかけて生じる (*Gn. Litt.* 4.24.41)。「この後で[夕の認識の後で] 創造者よりも自己自身をより好むような具合に自己自身に満足したとすれば、朝は生じなかったであろう」(*Gn. Litt.* 4.32.49)と言われる。つまり、第一日目の夕において、天使は被造物である自己自身を見つめるが、朝において神へと視線をあげず、自己自身にとどまり、神への賛美へ帰還することを拒むとき離反が起こるのである。
- <sup>10</sup> Solignac, Aimé “Exégèse et Métaphysique Genèse 1, 1-3 chez Augustin” *In principio*, 153-171, Paris, Etudes Augustiniennes, 1973, 164 参照。
- <sup>11</sup> アウグスティヌスは、「水が地下から湧き出て、土の面をすべて潤した」(創2.6)という記述に着目し、この箇所には創造の六日間と統治のわざとの境界線を引いている (*Gn. Litt.* 5.7.20)。
- <sup>12</sup> 『三位一体』3.8.13においては、悪魔も同様に諸元素における種子的理拠に従って事物を生み出すことができると論じられている。

宮脇 南帆

## 文献リスト

### 底本と邦訳テキスト

*Civ. Dei*, : *De Civitate Dei* 『神の国』

- ・ Augustin d'Hippone, *La Cité de Dieu*, Bibliothèque Augustinienne, Œuvres de Saint Augustin 33-37, texte de la 4e édition de B. Dombart et A. Kalb, intr. et notes G. Bardy, trad. G. Combès, Paris: Desclée de Brouwer, 1960.
- ・ アウグスティヌス『神の国』アウグスティヌス著作集 11-15, 泉治典訳, 教文館, 1980-1983年

*Div. Qu. 83* : *De Diversis Quaestionibus LXXXIII* 『83問題集』

- ・ Augustin d'Hippone, *Quaestiones 83*, Bibliothèque Augustinienne, Œuvres de Saint Augustin10, texte de l'édition bénédictine, intr. trad. et notes G. Bardy, J.-A. Beckaert et J. Boutet, Paris: Desclée de Brouwer, 1952.

*Gn. Litt.* : *De Genesi ad Litteram* 『創世記逐語注解』

- ・ Augustin d'Hippone, *La Genèse au sens littéral*, Bibliothèque Augustinienne, Œuvres de Saint Augustin 49, intr. trad. et notes P. Agaësse et A. Solignac, Paris: Desclée de Brouwer, 1872.
- ・ アウグスティヌス『創世記注解』アウグスティヌス著作集 16-17, 片柳栄一訳, 教文館, 1994-1999年

### 参考文献一覧

- ・ 河野一典「アウグスティヌスにおける霊的質料の問題：『創世記』冒頭の解釈をめぐって」『中世思想研究』33, 98-109, 1991年
- ・ 河野一典「アウグスティヌスにおける霊的被造物の創造の問題：『創世記』注解を中心に」『中世思想研究』43, 69-86, 2001年
- ・ 片柳 栄一『初期アウグスティヌス哲学の形成』創文社, 1995年
- ・ 片柳 栄一「アウグスティヌスの時間論の形而上学的背景」『中世思想研究』45, 23-40, 2003年
- ・ 片柳栄一「創造における *conversio* : アウグスティヌスの『創世記逐語注解』における霊的被造物の生成」『中世思想研究』25, 59-79, 1983年
- ・ 共同訳聖書実行委員会『聖書：新共同訳 旧約聖書続編つき』日本聖書協会, 2011年
- ・ Daniélou, Jean, *The Angels and Their Mission According to the Fathers of*



- the Church, New York: Newman Press, 1957
- ・ Fitzgerald, Allan, ed., *Augustine through the Ages*, Grand Rapids: Eerdmans, 2009
  - ・ Fleteren, Frederick Van, “Angels” Fitzgerald, ed., *Augustine through the Ages*, Grand Rapids: Eerdmans, 2009
  - ・ Klein, Elizabeth, *Augustine’s Theology of Angels*, Cambridge University Press, 2018
  - ・ Knuuttila, Simo, “time and creation in Augustine” *The Cambridge Companion to Augustine 2<sup>nd</sup>ed.*, 81-97, Cambridge University Press, 2014
  - ・ Madec, Goulven, “Angelus” *Augustinus Lexicon*, vol.I. Basel: Shwabe & Co., 1986
  - ・ Muehlberger, Ellen, *Angels in Late Ancient Christianity*, Oxford: Oxford University Press, 2013
  - ・ Solignac, Aimé “Exégèse et Métaphysique Genèse 1, 1-3 chez Augustin” *In principio: Interprétations des premiers versets de la Genèse.*, 153-171, Paris: Etudes Augustiniennes, 1973
  - ・ Wiebe, Gregory, *Fallen Angels in the Theology of Augustine*, Oxford University Press, 2021